

松井繁先生を偲んで

松木勝彦

311-0063 さいたま市プラザ2-10

平成16年9月27日、勤め先で妻からの電話を受けて一瞬自分の耳を疑った。今、日本白鳥の会事務局の小西さんから電話があり、松井先生が昨夜お亡くなりになったという内容だった。実は、11月20日札幌で、大学出身学部50周年記念の同窓会があり、その前日に松井先生ご夫妻と会食をすることになっており、その日を心待ちにしていた矢先でした。

松井先生とのお付き合いは、忘れもしない昭和37年12月24日、網走市で整形外科医院を開業されていた先生をお訪ねしたのが始まりでした。先生の白鳥の写真の腕前は、当時の文藝春秋12月号のグラビアを飾るほどでした。当日診療を終えた先生に、夕焼けに染まる涛沸湖に案内していただき一面に結氷した湖の一筋の開水面に集まったオオハクチョウを見せて頂いたのが昨日のように思い出されます。3月になれば湖面も開け、いろいろな水鳥が見られるようになるから、また、お出でなさいというお言葉に甘えて、その後再三網走をお邪魔するようになりました。先生は当時から日本各地の白鳥渡来地を訪れて写真集にまとめ、また、保護活動にかかわる人のネットワークを作りたいという構想を描いておられました。

昭和40年に先生は札幌に桑園中央病院を開院され、診療と病院経営の傍ら北海道野生動物写真研究会の活動にも主力メンバーとして活躍されていました。昭和42年の寒



松井先生(左)と共に。1995年5月5日、サハリン・バクラニエ湖で。

波で野付湾が氷結し尾岱沼春別川河口も凍結し多くのオオハクチョウが飢えに苦しんでいるときに、北海道放送TVの番組に出演し、たまたま札幌駅前通りの三菱ショールームで開いた会員の写真展の写真を餌代のために買い上げてくれるよう訴えたことも忘れられない先生の一面です。

北海道内ばかりでなくその後、日本各地の白鳥渡来地をまわられ、天性の人を魅了する包容力で各地に人脈を作られ、昭和48年6月に設立された本会の下地作りに貢献されたと思います。昭和43年に先生は大病を患われましたが、健康を取り戻され、昭和50年には悲願の写真集「日本の白鳥」を上梓されました。この写真集には写真に加えて当時の日本の主な白鳥渡来地36箇所を紹介もされており、往時を物語る貴重な資料になっています。

先生は白鳥の渡りルート の 解明にも情熱を注がれ、自ら車で道内各地を回られ地元の人に、返信先を書き込んだ葉書とお礼のしるしのタオルをセットにして渡し、白鳥の渡りに関する情報を蒐集されておられていたのも思い出のひとつです。また、国際的にも活躍され、IWB日本支部の設立に尽力され、昭和55年2月には札幌市でIWB国際会議「ハクチョウとツルのシンポジウム」の開催には大きな役割を果たされたのは記憶に新しいことです。

本会の発展のためには、長年に亘り事務局を桑園中央病院内に置いて、東京で行われる年次総会のお世話をはじめ会運営の基礎固めして下さったと言って過言ではないと思います。

先生との思い出には、網走原生花園の砂丘の上から流氷の上を帰北する白鳥の群れを見送ったことや、ご家族と一緒に夏の石狩太美の原野でシマアオジ、ノビタキ、コウライキジなどの野鳥を観察したこともあります。それにも増して忘れられないのは、先生を団長とし行われた1995年（平成7年）5月のサハリン白鳥ツアー参加させて頂いたことです。5月1日の小樽からの船出から7日の稚内帰港まで、夢の中にいるような至福の時間でした。

昭和37年12月24日以来、先生を介して多くの素晴らしい人たちとの出遭いがありました。楽しい思いをさせて頂きました。本当にいろいろとお世話になり感謝の気持ちで一杯です。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

安らかにお休みください。